

大学入学者選抜試験における AO 入試の位置づけと お茶の水女子大学の AO 入試

中里陽子*・安成英樹**

お茶の水女子大学 教育開発センター*・お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科**

The Admission Office Entrance Examination at Ochanomizu University

Yoko NAKAZATO* and Hideki YASUNARI**

Ochanomizu University; Center for Research and Development of Education*, Graduate School of
Humanities and Sciences**

The Admission Office Entrance Examination is a method for evaluating the applicants' abilities, potentials, and learning motivations by checking their entry sheets and holding an interview examinations. Ochanomizu University developed its own admission office entrance examination system and started to administer in 2008, and continued several publicity activities such as the open campus. The results of the analysis for Grade Point Average (GPA) after entrance have indicated that the students with the Ochanomizu Admission Office Entrance examination showed high scholastic levels. Additionally, this study indicated that the Ochanomizu University publicity activities successfully leads to the Admission Office Entrance Examination applicants through the analysis for 30 applicants questionnaires in 2015. Future research should examine more specifically the reasons for Ochanomizu Admissions Office Entrance Examinations and its publicity activities' positive effects on student's grades at university.

keywords : dmission Office Entrance Examination, admission policy, enrollment management

はじめに

AO 入試とは、詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、受験者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判定しようとするきめ細やかな選抜方法である（大学審議会、2000；文部科学省高等教育局長、2015）。偏差値偏重の受験競争の弊害の是正を促すこと（臨時教育審議会、1985）をねらいとした入試形態として着目され、導入が進められてきた。

本論文では、お茶の水女子大学の AO 入試制度の概要と AO 入試志願者獲得のための広報活動の現状を報告することを目的とする。

わが国で AO 入試が導入されるようになった経緯

AO 入試とは、学力検査に偏らず、書類審査や面接等を組み合わせた手間暇をかけた選抜方法である。AO 入試の特徴として、(1) 実施時期が早いこと、(2)

推薦入試とは異なり自己推薦で出願できること、(3) 選考過程で志望理由書、面接、論文等が課されること等が挙げられるが（渡辺、2005）、実施方法の詳細は各大学に委ねられている。「AO 入試」という言葉を日本にもたらしたアメリカでは、アドミッションオフィスが管轄して入学者の選抜を行っており、具体的には高校の成績や SAT (Scholastic Assessment Test)、ACT (American College Test) などの共通テストの成績が主な選抜資料として活用されている（富永、2005；山形・繁樹、2014）。この知見に基づくと、日本における AO 入試は、アメリカのそれとは異なり、過去の成績と現在の学力および将来の素質を測るために大学独自の選抜方法を多様に組み合わせた、非常に複雑な入学試験であると捉えることができる。

わが国で最初に AO 入試を導入したのは慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（総合政策学部、環境情報学部）であった。1990 年に慶應義塾大学は、これまでの画

一的なペーパーテストでは発掘が困難であった潜在能力の高い学生を獲得することを目的としてアドミッションオフィスを立ち上げた。当時は、既に導入されていた早稲田大学の「一芸入試」と混同されたこともあったが（尾室、2012）、成績以外に一芸あれば受け入れられた一芸入試とは異なり、多面的な選考を手間暇かけて行ったことが一躍話題を集めた。また、アドミッションオフィスの専門職員が教員とともに入試の実施に当たり、入学選抜に関する専門知識や経験を持つ事務職員が選抜の意思決定に関与したという点でも大きな注目を集めた入試であった（孫福・小島・熊坂、2004）。

慶應義塾大学のAO入試は手間がかかるものであり、入試に携わる大学教員への負担が大きかったことから、その後しばらくは他大学で積極的に導入されることはなかった。ところが、熾烈な受験競争を緩和するために、長年にわたり多様な入試選抜の実施（入試方法の多様化、評価尺度の多様化、受験機会の複数化）を奨励していた文部科学省が、1990年の慶應義塾大学における導入を契機に、多様な入試選抜を実現する方法としてAO入試に大きな期待を寄せるようになった。実際に1990年以降は、大学への進学率が50%を超えるユニバーサル段階（トロウ、1976）をわが国で迎えることが考慮され、各大学の教育理念や目的に適した学生を適切に選抜するために評価尺度を多元化し、受験生の能力や適性を多面的に判定するよう求める提言がなされている（大学審議会、1993）。さらに1997年には、総合的かつ多面的な評価を重視する丁寧な入学選抜の実現のための研究開発や実施体制の構築を進めるために、アドミッションオフィスの整備が推奨された（中央教育審議会、1997）。1999年には東北大学、筑波大学、九州大学がアドミッションオフィスを設置し、翌年にはAO入試を導入した。これらの3つの大学が国立大学で初めてAO入試を導入したことを受け、全国の大学でもAO入試が少しずつ導入され始めるようになった。

AO入試の導入にさらに拍車をかけた要因として、大学（および高校双方）の教育形態そのものが社会的な要請により転換を求められてきたことも大きい。近年の大学は、知識基盤社会で活躍する人材を輩出するべく、学士力や社会人基礎力の育成が教育の質保証として求められるようになった。また、それを実現する教育形態として、多くの大学が教員中心である知識伝達型の授業から、学習者中心の知識構成型授業（アクティブラーニング型授業）への移行に注力するよう

なった（e.g., 溝上、2007, 山内、2010）。現在では、他のメンバーと協働し学んでいく協調型の体験学習が積極的に導入されている。大学はこれらの授業形態に適応し能力を向上させる素質を備えた学生を獲得することが求められており、入学選抜における評価方法や評価基準の改善に取り組むべき状況は各段に増している。

以上の背景に基づき、わが国の大学は、教育形態とともに入試形態の転換を加速させている。最近では補助事業による政策的な介入もあり、具体的には平成26年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム（テーマ④：入試改革）」に採択されたお茶の水女子大学、岡山大学、追手門学院大学が多面的評価を活用した選抜方法の精緻化を進めている。また、東京大学（推薦入試）、京都大学（特色入試）、大阪大学（世界適塾入試）等の選抜性の高い大学でも多面的評価を活用した入試を導入予定であることが公表され、AO入試を中心とした多面的評価を骨格とする入試改革が進められてきている。平成27年度大学入学選抜では、国立大学の57.3%がAO入試を導入しており（文部科学省、2014）、今後も増加が見込まれている。

お茶の水女子大学のAO入試制度

お茶の水女子大学では全学的な議論を慎重に重ねながら独自のAO入試制度を構築し、2008年度入学選抜に導入した。現在は、一般入試（前期、後期）、推薦入試、私費留学生入試、帰国子女入試、3年次編入試験、附属高校生を対象とした高大連携特別入試とらぶ学部生選抜試験（Table 1 参照）の一つとして実施されている。初年度の志願者数（出願要件に満たない者を除外した受理数）は99名であり、その後は60名前後を推移している（Table 2 参照）。

アドミッションポリシーについては、まず、お茶の水女子大学での勉学に強い意欲と専門性を磨いていくために必要となる十分な基礎学力をもっていることを条件とし、(1) 知識や意見を人に伝え、実践するためのコミュニケーション能力や応用力を備えている、(2) 真理の探究に対する憧憬と文・理双方への興味・関心をもっている、(3) 自分の将来と社会の未来へのビジョンを明確にもっている、(4) グローバルな視野をもって思考し、国際的な場での活動を希望している、のいずれか一つにあてはまる者と定めている（お茶の水女子大学、2015）。これらの条件に加え、お茶の水女子大学では各学部独自のアドミッションポリシーも提示している。

Table 1: 平成 28 年度お茶の水女子大学入学者選抜日程 (本学入学者選抜要項を一部改変)

入試種別	出願期間	試験日	合格発表
一般入試(前期日程)	平成28年1月25日(月)～ 2月3日(水)	平成28年2月25日(木)、 2月26日(金)*1	平成28年3月9日(水)
一般入試(後期日程)*2	平成28年1月25日(月)～ 2月3日(水)	平成28年3月12日(土)	平成28年3月20日(日)
AO入試	平成27年9月4日(金)～9 月9日(水)	【第1次選考】書類選考 【第2次選考】平成27年10 月17日(土)、10月18日 (日)	平成27年10月22日(木)
推薦入試、帰国子女・外 国学校出身者特別入試	平成27年11月2日(月)～ 11月6日(金)	【第1次選考】書類選考 【第2次選考】平成27年12 月5日(土)、12月6日(日) *3	平成27年12月17日(木)
私費外国人留学生特別 入試	平成27年12月7日(月)～ 12月17日(木)	平成28年2月25日(木)、 2月26日(金)	平成28年3月9日(水)
第3年次編入学(理学 部・生活科学部)	平成27年6月1日(月)～6 月4日(木)	平成27年6月24日(水)、 6月25日(木)	平成27年7月2日(木)
第3年次編入学(文教育 学部・生活科学部)	平成27年9月15日(火)～ 9月18日(金)	【第1次選考】平成27年10 月3日(土) 【第2次選考】平成27年10 月28日(水)	平成27年11月5日(木)

- *1) 一般入試(前期)の2月26日(金)は、「文教育学部芸術・表現行動学科」「理学部全学科」「生活科学部食物栄養学科」「生活科学部人間・環境科学科」のみ実施する。
 *2) 「文教育学部言語文化学科」「文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学コース」、「生活科学部人間生活学科」は、一般入試(後期日程)を行わない。
 *3) 推薦入試、帰国子女・外国学校出身者特別入試第2次選考の12月6日(日)は、文教育学部のみ実施する。
 *4) 高大連携特別入試については、お茶の水女子大学附属高校生を対象として実施する。

平成 28 年度 AO 入試の出願資格は、「高等学校若しくは中等教育学校を平成 26 年 3 月以降の卒業生および平成 28 年 3 月卒業見込みの者。調書の学習成績概評が A 段階に属する者」であった。また、各学部独自の出願資格も設定している。これらを満たした志願者の中から、毎年全学で 10 名以内の学生を選抜している。

選考プロセスは次の通りである。まず第一次選考では、高校の調査書、2000 字程度で記された志望理由書、活動報告書を用いた書類選考が行われる。アド

ミッションポリシーを満たしているかはもちろんのこと、その他の細かな評価基準を設けて選考が行われている。

第二次選考では、まず 1 日目に日本語による文系講義と理系講義が行われる。例年、共通テーマに基づいた講義を提供しており (Table 3 を参照)、平成 28 年度入試の共通テーマは「水」であった。講義終了後は、これらの内容をふまえたレポートを作成し、グループディスカッションに取り組んでもらう。1 日目の最後には、すべての内容をふまえた小論文の作成に取り組んでもらうことになっている。これらの過程を通して、受験生の文理双方における学力や主体的な思考力を伴う協調性を測ることを狙いとしている。

2 日目には、英語の講義が行われ、その要約を求めたレポート作成が日本語で行われる。その後、グループ面接と理系学科進学希望者には学科面接が施される。なお、AO 入試でたとえ不合格になったとしても、その後の推薦入試、一般入試 (前期、後期) のいずれにもチャレンジできる仕組みを設けており、受験者には複数回の受験機会が与えられている。

さらに、合格者には入学前教育の一環として合格者研修会に参加してもらう。在学生との交流を持ち、入学後の明確なイメージを持ってもらうことで、大学入

Table 2 お茶の水女子大学の AO 入試志願者、合格者、および入学者数

年度	志願者数	合格者数	入学者数
2008	99	9	9
2009	63	10	10
2010	81	6	6
2011	57	8	8
2012	47	8	8
2013	46	8	8
2014	42	9	9
2015	59	9	9
2016	64	6	—

Table 3 お茶の水女子大学 AO 入試の第二次 選考模擬講義テーマ

平成20年度	確からしさ
平成21年度	個
平成22年度	時間
平成23年度	分かち合うこと、奪い合うこと
平成24年度	ユートピア
平成25年度	親から子へ
平成26年度	ことば
平成27年度	からだ
平成28年度	水

学への意欲の維持を狙いとしている。また可否には直接関与しないが、センター試験の受験を必須とし、自宅での e-learning 英語教材や推薦図書を課すことで自律的な学習習慣を定着させている。これらの学習には AO 入試室スタッフが中心となって指導にあたっており、基礎学力が維持されるよう丁寧なサポートが行われている。

このような複雑な選考過程を経て選抜され、徹底された入学前教育指導を受けているお茶の水女子大学の AO 入学生は入学後に優秀な成績を取めている。たとえば加藤（2011）は、2008 年度および 2009 年度 AO 入学者の成績推移データを提示し、お茶の水女子大学 AO 入学者の学力水準が高いことを示している。また、お茶の水女子大学 AO 入試室による調査結果では、2010 年度以降の AO 入学者の成績も平均的に優れていることが確認されている（お茶の水女子大学 AO 入試室、未発表資料）。

AO 入試志願者獲得に向けたお茶の水女子大学の入試広報活動

お茶の水女子大学では優秀かつアドミッションポリシーを満たした学生を AO 入試で獲得するために、入試推進室および入試課スタッフを中心として、工夫をこらした様々な入試広報活動を推進してきた。

まず大きなものとして、オープンキャンパスが挙げられる。お茶の水女子大学オープンキャンパスは毎年 7 月下旬の 3 日間で開催されている。平成 27 年度は 7 月 18 日（土）、19 日（日）、20 日（月）に開催され、3 日間で合計 6300 名の高校生および保護者が参加した。全体説明会で副学長による AO 入試制度の紹介がなされた他、オープンキャンパス会場には AO 入試説明を担当する特別ブースも設けられ、AO 入試に関わる積極的な広報がなされた。

次に、進学相談会でも積極的に PR 活動を行ってい

る。年間を通して、関東地域だけでなく全国で開催される相談会に参加し、相談者の特性やニーズに合った入試情報を提供しながら、入試広報を展開している。高校からの招待を受ける形で、出前授業を含めた大学説明会を行うことも多い。

さらに、平成 27 年度には高大連携を目的としたプレゼミナールを大学キャンパスで開催し、AO 入試の広報活動にさらに注力している。プレゼミナールとは、アカデミックな観点から大学を紹介し、大学の学びを知ってもらうことを目的とした全学的な取り組みである。初年度である平成 27 年度は 8 月 24 日（月）、25 日（火）の 2 日間にわたって開催された。1 日目は、文系では「格差」をテーマとして、基調講義（教育社会学）とそれに続く 5 つのセミナー（日本近世史、バイリンガル教育、社会学、教育開発論、新領域法学）を開講した。理系では、数学、物理、化学、生物、情報科学、食物栄養学、環境学の最先端の研究に基づくセミナーを開講した。また、2 日目には、平成 29 年度入試より導入予定の図書館入試の模擬体験や大学院生による課題研究発表会を実施した。すべてのセミナーやイベントに現役の学部生および大学院生を参加させ、高校生にロールモデルを提示することで、高校生の大学入学への意欲を高揚させ、お茶の水女子大学受験、特に AO 入試受験へ誘引することをねらいとしていた。

お茶の水女子大学 AO 入試事後アンケートの調査報告

こうした入試広報活動の成果を検証する試みの一つとして、お茶の水女子大学では AO 入試志願者を対象としたアンケート調査を実施している。本論文では、平成 28 年度お茶の水女子大学 AO 入試第一次選考合格者 30 名を対象とした AO 入試事後アンケートの調査結果を紹介する。

このアンケート調査は、AO 入試志願者が AO 入試を受験するまでのプロセスを明らかにするために実施された。平成 28 年度 AO 入試二次選考試験二日目の昼食休憩後に配付し、最終試験科目であるグループ面接終了後に回収された。回収率は 100% であり、そのすべてを分析対象とした。具体的な調査項目は、次の通りである。

まず、お茶の水女子大学の AO 入試をどのように知ったのかを尋ねた。本調査では「a. 高校」「b. お茶の水女子大学ホームページ」「c. お茶の水女子大学オープンキャンパス」「d. お茶の水女子大学プレゼミナール」「e. 受験案内雑誌」「f. 予備校・塾」「g. 両親

から聞いた」「h. 友達から聞いた」「i. その他」の選択肢を設け、該当するものを全て選択してもらった。

次に、お茶の水女子大学のオープンキャンパスおよびプレゼミナールに参加したかどうかを尋ねた。

さらに、AO 入試受験を決めるにあたり、誰に相談したかを尋ねた。本調査では、「a. 高校の先生」「b. 両親」「c. 予備校や塾の先生」「d. 自分一人で決めた」「e. 友達」「f. その他」の選択肢を設け、該当するものを全て選択してもらった。

結果

まず、お茶の水女子大学 AO 入試志願者が AO 入試をどのように知ったかを確認した。その結果を Figure 1 に示す。調査の結果、提示された選択肢のうち最も選択率が高かったのは「お茶の水女子大学ホームページ」であり、その選択率は 70% (30 名中 21 名) であった。次いで、「お茶の水女子大学オープンキャンパス」(選択率 36.7%)、「高校」(選択率 26.7%) の順に選択率が高かった。なお、その他を回答した受験生からは「大学パンフレット」や「先輩から聞いた」の回答が得られた。これらの結果より、お茶の水女子大学 AO 入試志願者はホームページやオープンキャンパスや高校で、お茶の水女子大学の AO 入試の存在を把握している傾向があることが示された。

次に、お茶の水女子大学 AO 入試志願者がオープンキャンパスやプレゼミナールに参加したかどうかを確認した。その結果を Figure 2 に示す。調査の結果、オープンキャンパスに「参加した」と回答した志願者は 24 名で、全体の 80% を占めていた。他方、「参加しなかった」と回答した志願者は 6 名だった (全体の 20%)。プレゼミナールに「参加した」志願者は 12 名であり、全体の 40% を占めていた。

さらに、お茶の水女子大学 AO 入試志願者は、AO

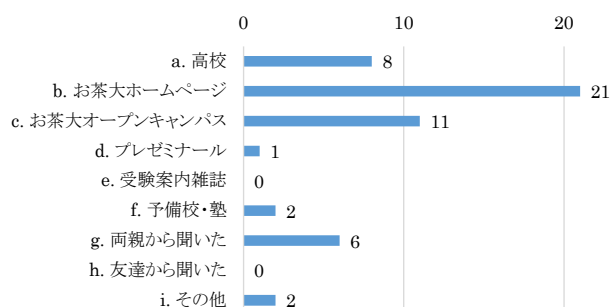


Figure 1 平成 28 年度お茶の水女子大学 AO 入試志願者 (一次選考合格者 30 名) が本学 AO 入試を知ったきっかけ (表内数値は選択した人数)

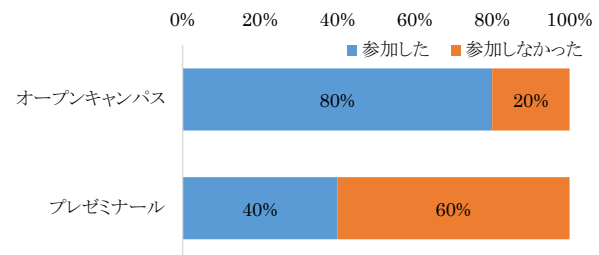


Figure2 平成 28 年度お茶の水女子大学 AO 入試志願者 (一次合格者 30 名) におけるオープンキャンパスとプレゼミナールの参加率

入試出願の際に誰に相談したかを確認した。その結果を Figure 3 に示す。調査の結果、「両親と相談して決めた」の選択率が 86.6% (30 名中 26 名) と最も多く、次いで、「高校の先生と相談して決めた」の選択率が 50% を満たしていた。お茶の水女子大学 AO 入試志願者は、両親や高校の先生に相談しながら、お茶の水女子大学の AO 入試受験を決めている傾向があることが示された。

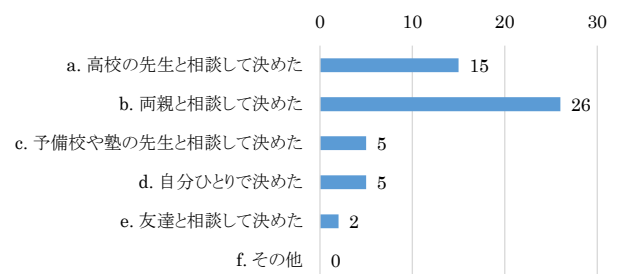


Figure 3 平成 28 年度お茶の水女子大学 AO 入試志願者 (一次 選考合格者 30 名) が本学 AO 入試受験にあたり相談した相手 (表内数値は選択した人数)

まとめ

本論文では、お茶の水女子大学における AO 入試制度の概要と入試広報活動の現状を報告することを目的とした。AO 入試がわが国で展開されるようになった背景として、偏差値偏重を是正することをねらいとした政府の戦略的な介入があった。入学者選抜の多様化を推奨していた政府は、1990 年に慶應義塾大学が導入した AO 入試に着目し、評価尺度の多元化を実現させる入試方法として AO 入試の導入を提唱するようになった。アドミッションオフィスの整備を進めた東北大学、筑波大学、九州大学が、政策的な後押しもあり国立大学で初めて AO 入試を導入したことで、現在では全国的にも広がりを見せつつある。また、大学教育の質保証に向けた取り組みとして、教員中心である知識伝達型授業から学生中心のアクティブラーニング型

授業への転換が余儀なくされる大学では、新しい授業形態に適応できる学生を獲得するためにも、多面的評価を骨格とした選抜方法の精緻化が求められている。こうした社会的要請を受け、お茶の水女子大学では現在の学力や将来の資質を多面的に評価する AO 入試制度を独自に構築し、2008 年度入試より導入した。複雑な選抜と入学前教育を経て入学したお茶の水女子大学 AO 入学生は、大学入学後に優秀な成績を収めていることが確認されている。

また、アドミッションポリシーに適合する志願者を獲得するために、お茶の水女子大学では入試広報活動にも注力し、オープンキャンパスや全国各地で開始される進学相談会で AO 入試の積極的な PR を行っている。さらに、平成 27 年度より高大連携を目的としたプレゼミナールに全学的に取り組み、大学での学びを体験してもらう機会の提供と同時に、AO 入試の積極的な PR に活用している。

これらの入試広報活動の成果として、本論文ではお茶の水女子大学の AO 志願者の受験に至るまでの過程の検討を試みた。その結果、お茶の水女子大学の AO 入試志願者はホームページで AO 入試を知るものが多く、お茶の水女子大学の特徴を知る機会として、オープンキャンパスやプレゼミナールに参加していることが示された。ホームページは、大学側の情報発信と受験生側の双方で効果を持ち、オープンキャンパスやプレゼミナールは、AO 入試受験につなげる大きなきっかけの一つとして機能している可能性がうかがえた。また、お茶の水女子大学の AO 入試志願者は、両親や高校教員と相談しながら AO 入試受験を決めている傾向があり、入試広報として、両親や高校教員をターゲットにした活動を継続的に進める必要性も確認された。

最後に、今後の課題を整理する。まず、本論文ではお茶の水女子大学の AO 入試志願者を対象とした個人認知に基づくアンケート結果をもってお茶の水女子大学の入試広報活動の成果の検討を試みた。今後は、他大学の事例との比較を通して、お茶の水女子大学の入試広報活動の継続的な効果検証を行うことが求められる。

また、AO 入試は、大学と入学志願者のマッチングを丁寧に行う選抜方法として多くの大学で確立されており、AO 入試によって選抜された入学生には優秀な学生が多いことが他大学でも報告されている。たとえば九州大学では、AO 入学生は他入試形態による入学生と比較して大学への適応感が高いことが確認され

ている (e.g., 渡辺、2005)。同志社大学ではピアサポーターとして学生支援活動に従事する学生の中で、AO 入学者の割合が比較的多いことが示される (吉岡、2013) など、AO 入試によって高い意欲と能力の両方を備えた優秀な学生が獲得されているケースも報告されている (この点のレビューについては渡辺・福島、2008 を参照)。

しかしながら、これらの成果が、文部科学省によって推奨されている「多面的評価」そのものによる功績であると言えるかは疑問も残されている。具体的には、文部科学省が多面的評価を推奨する根拠となった入学者選抜試験の追跡調査結果 (西堀・松下、1963; 能力開発研究所、1968, 1969) には統計上の解釈に誤りがみられ、多面的評価の妥当性に根拠がないことがその後の研究で指摘されている (木村、2007)。

大学への入学希望者数が入学者数と一致する大学全入時代を迎え、入学者の質の多様化がさらに広がっている。アドミッションポリシーに適合する学生の獲得と入学後の能力開発に向けて、学内の IR (Institutional Research) チームと連携をとりながら、AO 入試のどのような側面に効果があるのかを検討し、選抜システムの精緻化を継続することが求められる。

謝辞

本論文の執筆にあたり、お茶の水女子大学入試推進室の山本隆副室長 (入試課長)、AO 入試室アカデミックアシスタントの池田美千子さん、松尾有里子さん、入試課の皆様にご支援をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 中央教育審議会 (1997) 「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第 2 次)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309655.htm (平成 27 年 11 月 17 日閲覧)。
- 大学審議会 (2000) 「大学入試の改善について (答申)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315956.htm (平成 27 年 11 月 17 日閲覧)。
- 大学審議会答申 (1993) 「大学入試の改善に関する審議のまとめ」『大学資料』第 121.122 合併号, pp.20.
- 加藤敬子 (2011) 「お茶の水女子大学 AO 入試の現状」『高等教育と学生支援』1, 37-48.

- 木村拓也 (2007) 「大学入学者選抜と「総合的かつ多面的な評価—46 答申で示された科学的根拠の再検討—」『教育社会学研究』80, 165-186.
- 京都大学ホームページ「特色入試」<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/admissions/tokusyoku/> (平成 27 年 11 月 17 日閲覧).
- 孫福弘・小島朋之・熊坂賢次 (2004) 『未来を創る大学—慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) 挑戦の軌跡—』慶應義塾大学出版会.
- 溝上慎一 (2007) 「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』7, 269-87.
- 文部科学省 (2014) 「平成 27 年度国公立大学入学者選抜の概要」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/_icsFiles/afieldfile/2014/09/11/1351606_01_1.pdf (平成 27 年 11 月 25 日閲覧).
- 文部科学省高等教育局長 (2015) 「平成 27 年度大学入学者選抜実施要項 (27 文科高第 261 号)」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/06/15/1282953_01_1.pdf (平成 27 年 11 月 25 日閲覧).
- 西堀道雄・松下康夫 (1963) 「大学入学試験の研究 (鑑)—高校学業成績及び大学入学試験成績と大学在学中の学業成績との関係—」『国立教育研究所紀要』37.
- 能力開発研究所 (1968) 「能研テストの妥当性に関する研究—追跡調査資料特」.
- 能力開発研究所 (1969) 「能研テストの妥当性に関する研究—追跡調査資料鑑」.
- お茶の水女子大学 (2015) 「平成 28 年度お茶の水女子大学入学者選抜要項」.
- お茶の水女子大学 (2015) 「平成 28 年度お茶の水女子大学特別入試学生募集要項アドミッション・オフィス入試 (AO 入試)」.
- 大阪大学「世界適塾入試」http://www.osaka-u.ac.jp/ja/admissions/faculty/world_tekijuku/files/h29world_tekijuku.pdf (平成 27 年 11 月 17 日閲覧).
- 尾室拓史 (2012) 「AO 入試に対する社会的評価の変遷：新聞紙上における語られ方の分析」『Keio SFC journal』12(2), 109-120.
- 臨時教育審議会 (1985) 「教育改革に関する第一次答申」総教第 200 号.
- 東京大学ホームページ「推薦入試」http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_26_j.html (平成 27 年 11 月 17 日閲覧).
- 富永倫彦 (2005) 「アドミッション・オフィス入試に見る大学改革への課題」『大学教育』2, 59-65.
- トロウ, M・天野郁夫・喜多村和之訳 (1976) 『高学歴社会の大学』東京大学出版会.
- 吉岡路 (2013) 「学習者を主体とした高大接続教育の課題と展望」『立命館高等教育研究』13, 43-60.
- 渡辺哲司 (2005) 「AO 入試と大学における学習」『大学教育学会誌』27(1), 146-151.
- 渡辺哲司・福島真司 (2008) 「公表データからみる AO 入学者の評価—国公立 16 大学からの追跡調査報告レビュー—」『大学入試研究ジャーナル』18, 131-136.
- 山形伸二・繁桝算男 (2014) 「第 7 章 米国の競争性の高い大学におけるアドミッションズ・オフィスの機能」pp.153-179. 繁桝算男編『新しい時代の大学入試』金子書房.
- 山内祐平 (2010) 「大学の空間をデザインする」pp.239-249. 渡辺信一 (編) 佐伯胖 (監修) 『学びの認知科学 時点』大修館書店.

2015 年 12 月 8 日 受稿